

「今昔物語集」随想

間 田 笑 子

こんな光景が見えてきた。

時は 1050 年前後、奈良の寺院で(東大寺、あるいは興福寺とされる)ひとりのお坊様のお説教が今しも始まろうとしていた。善男善女の熱い眼差しが壇上の講師にそそがれる。

時代は混沌としている。長い公家の政治が終わり、武士という武力階級が世の中を支配しようとしていた。保元の乱(保元元年・1156)、平治の乱(平治元年・1159)などの戦乱で、まるで盆をひっくり返したように、世の中は乱れに乱れている。

折しも、末法思想がはびこっている最中だ。民衆はおびえている。「どうやってこの末世を生き抜いていけばいいのか」、「極楽往生はできるのだろうか」と。

「彼らは何かに救いをもとめている。み仏の教えで、民を救いたい。み仏の教えを下々にも広めなければならない。(当時、仏教は政治と結びついており、特定の階級の人々のものであった) どうしたらいいだろう。」

お坊様は、民の心に近づきたいと願った。しかし、本の中に埋もれたような生活を送っていたお坊さまに、いったい何が出来るというのだろうか。お坊様は悩みに悩んだ末、はっと気づいた。「そうだ仏典の中にあるいろいろなおもしろい話を、説教の中に入れてみよう。民がみ仏に救われるように、仏のみ教えに従えるように。」

お坊様は手元にある本を選び始めた。参考にする文献はいくらでもあった。

そのころ、日本人にとっては「天竺」「震旦」「本朝」が全てであった。

つまり、この三国がほぼ全世界に等しい国々であったのである。

「震旦」の部は『さんぼうかんのうようりやくろく三宝感応要略録』、『めいほうき冥報記』、『くさんほっけでん弘贊法華伝』、『こうしでん孝子伝』などの中国の文献がある。

「本朝」の部は『にほんりょういき日本靈異記』、『にほんおうじょうごくらくき日本往生極楽記』、『ほんちょうほっけげんき本朝法華驗記』、『じぞうぼさつれいげんき地藏菩薩靈驗記』、『三宝絵詞』などがある。

「天竺」の部は各種の教典、仏書から探せばよい。

お坊様はこんな風に考えたにちがいない。(お坊様が一人であったのか、それとも複数いたのかは分からない。)とりあえず説教をしてみよう。ありがたいみ仏の話にたみびと民人は喜んでくれるだろうか。

お坊様は、今までのようにオーバーな言い回しをせず、ありのままに、具体的に、率直な話し方でみ仏の功德を説いてみた。すると民人の反応は素早かった。寺のお説教場は押すな押すなの大盛況、善男善女の民人は寺の境内の外にもあふれんばかり。お坊様は思ったことだろう「これはいける、と。」

お説教を始めたお坊様は、そのうち説話集めに夢中になってきた。最初はありがたい釈尊の教えや、聖人の話をしていたが、そのうち世俗の話も入れてみた。『日本靈異記』、『将門記』など、日本だけでなく、震旦や天竺にも伝わる不思議な話、滑稽な話などを、庶民の泣き笑いを見逃さず、つぶさに描いていった。

それは一見世間話のようにみえたが、「源氏物語」の中で、源氏の君が「(物語は)神代より世にある事を記しおけるなり。日本紀などはただかたそばぞかし。これらにこそ道々しく詳しきことはあらめ」と述べているように、(実際のところ、お坊様が源氏物語を読んでいたかは怪しいものだが)、実は、その世間話の中にこそ人間のありようや、世の中というものの興味や関心が描かれたもののように思われた。

こうなると本来の目的を忘れて、お坊様は自分自身のために説話を探し始めた。こうして集めた話は「天竺の部」が五巻まで、「震旦の部」が六巻から十巻まで(八巻は欠如)、「本朝の部」が十一巻から三十一巻(十八、二十一巻は欠如)までにもなった。集められた説話は千をこえた。

その構成は次の図のようになる。

今昔物語集の構成

巻	内容		
1	天竺部	仏法	仏の出世・仏教創始
2			仏の教化
3			仏の教化・入滅
4			入滅後の仏教
5		世俗	<small>ほんじょう</small> 本生・動物
6	震旦部	仏法	仏教伝来・諸仏靈驗
7			諸経靈驗
8			(諸菩薩・諸僧靈驗か)
9		孝子・因果応報	
10		世俗	世俗諸譚
11	本朝部	仏法	仏教伝来・諸寺縁起
12			諸法会縁起・諸仏靈驗
13			法華経靈驗
14			法華経靈驗・諸経靈驗
15			往生
16			観音靈驗
17			地藏靈驗・諸菩薩靈驗
18			(諸僧靈驗か)
19			出家・孝子・因果応報
20			天狗・現報
21			(皇室史か)
22		藤原氏列伝	
23		<small>ごうりき</small> 強力	
24		技芸・詩歌	
25		武士	

2 6		俗世	しゆくほう 宿 報
2 7			霊鬼・怪異
2 8			滑稽
2 9			悪行・動物
3 0			歌物語
3 1			雑

「今昔物語集」の成立には諸説ある。(作者といわず、あえて編者とよぶが、そういわれている人たち、鳥羽僧正かくゆう ちゅうじん覚猷、忠尋僧正、東南院かくじゅ覚樹、源俊頼、大江匡房、白河院を中心とする側近的僧俗グループ、比叡山ゆかりの貴族出身の遁世人道者、無名の中下級僧ないし下級貴族、大寺院所属の書記的人物、南都系寺院の僧、元興寺有縁の無名僧など十指にあまる)

そうこうしているうちに、世の中は大きく変わった。平氏と源氏の戦のさなかで、東大寺と興福寺は 1180 年(治承 4 年)の暮れ、平重衡を大將軍とする平氏の軍勢の放った火に炎上し、天平創建の大仏殿をはじめとして、ほとんどの堂舎が焼けてしまったのである。しかし、お坊様が書きためた巻物は焼け残った。奇跡というべきであろうか。

だが、世の中はお坊様のお説教ではもう救われないほどに逼迫していた。

ここで、平安末期から鎌倉期にかけて、仏教がどのようなかたちでとらえられていたかを考えてみよう。

仏教には「正・像・末の三時」とよばれる下降史観があるそうだ。だんだん世の中が悪くなるという、悲観的な歴史の見方である。

ちなみに、「正法」とは、釈尊が亡くなってからの 1000 年間をいう。この時代は釈尊の教えが正しく生きていて、教えを実践する修行者がおり、修行すればその成果である「証」が得られるという。

「像法」とは、正法が終わってからの 1000 年間をいう。仏の教えを実践しよ

うとする修行者はいるが、修行の証が満足に得られなくなる時代である。仏法がやがて形骸化に向かっていくという。

「末法」とは像法が終わってからの 10000 年間続く時代をいう。教えだけが残り、修行者もいなくなり、したがって修行の成果もない破滅と暗黒の時代が続く。政治は乱れ、人心は悪化し、天変地災がおこり、疫病もはびこり出す。終末の時代である。

日本では永承 7 年（1052）に末法の時代にはいったとされている。

そのころの仏教はおもに特権階級のものであったといっていよう。貴族たちは、我が身の救済だけを考えていた。折しも藤原氏による摂関政治は行き詰まり、飢饉や水害などの災害も続発し、疫病が流行した。まさにこの世の終わりを呈する様相に、貴族たちは恐れおののき、あらそって寺院を建立し、寄進をした。「生ける浄土」と呼ばれた、藤原道長による「法成寺」^{ほうじょうじ}や、その子頼通による「宇治平等院」は、それらの代表的なものだろう。平等院は「極楽不審くば平等院へ参れ」とまでいわれた豪華絢爛たる寺院だった。

さらに南都仏教、北嶺（比叡山）の古代仏教は、国家や貴族階級には宗教的サービスを行うが、民衆の苦悩に向かいあい、救済を行う姿勢に欠けていた。

そのような世の中で、民衆には何ができたろうか。ただただ、み仏におすがりすることしかできなかつたに違いない。

そのころ都には、新しい法を説く僧達が現れ始めていた。空也上人、源信僧都、法然、親鸞などである。彼らはただ念仏をひたすら称えれば救われると説いた。全ての人々が唱えられる念仏こそが、末法の時代にふさわしい救済の教えであり、貧しく無知な凡夫こそが救われなければならないと説いたのである。新しい宗派の出現である。まさに時代の要請にこたえた宗教といえよう。親鸞はこの考えをさらに一步押し進めて、「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」（歎異抄）とまで言い切っている。

この時代に登場した新たな宗教は、浄土宗、浄土真宗、時宗、日蓮宗、臨済宗、曹洞宗の六宗であり、「鎌倉六宗」とよばれている。開祖となったのは、浄土系の法然・親鸞・一遍、法華宗の日蓮、禅宗の栄西・道元の六人であり、日本仏教

の主だった宗派は、鎌倉時代までに出そろった。

このような教えに、民衆はこぞって救いをもとめた。ましてや虐げられてきた女人の喜びはいかばかりであったろうか。しかし、国家・貴族にとって新しい宗教は危険なものだった。法然や親鸞は配流になるなど、さまざまな弾圧が僧達に加えられた。しかし、民衆の動きはもう止めることはできなかった。貴族階級におもねてきた従来の仏教は、ただ衰退の一途をたどっていった。もちろん、南都仏教の僧達のなかには、民衆の救済に力をつくした僧もいたらしい。が、新しい宗派の力には及ぶものではなかった。やがて、南都仏教は力を失っていった。

「今昔」のお坊様は、そんな時代をどのように見つめていたのだろうか。もはや、自分の居る場所は民の心の中には無いと悲観して、隠遁してしまったのかもしれない。それとも、東大寺や興福寺の炎上を見てしまったのか。

「今昔物語集」の成立はおよそ 1111 年或いは 1120 年より後、それからあまり隔たらない頃だといわれている。東大寺や興福寺の炎上を見ずして亡くなっていたかもしれない。それはそれで、お坊様にとっては幸せなことだった。

お坊様は「今昔物語集」をそっと寺院の一室に隠した。いつか誰かが自分の生きた「証」を見つけてくれるだろう、と。

かくて「今昔物語集」は、宝徳元年（1449）に見い出されるまで、寺院の一室で 300 年間静かに眠っていたのである。

近代の多くの作家達が「今昔」から大きな影響をうけている。殊に、芥川龍之介や堀 辰雄などが「今昔」から題材を得て、新しい解釈で名作を残していることは周知のことである。彼らに比すれば、おこがましく、足下に及ぶべくもないが、この壮大な書物に接して、末世の時代に一人の僧がどのように生きたかを、私なりの想像で描いてみた。

参考文献

- | | | | |
|---|-------|-------|---------|
| 親鸞 | 吉川英治 | 角川文庫 | 昭和 29 年 |
| 今昔物語集一
(日本古典文学全集 2 1) | 馬淵和夫他 | 小学館 | 昭和 46 年 |
| 今昔物語の世界
(現代語訳 日本の古典 8 今昔物語
尾崎秀樹他) | 池上洵一 | 学習研究社 | 昭和 55 年 |
| 日本の仏教 | 梅原正紀 | 現代書館 | 昭和 57 年 |